

農村医学の転換

富山県農村医学研究会

会長 豊田 文 一

20数年前、私ども同志が日本農村医学会を創立した頃、この学会名を英文でどう訳するかが問題となった。Rural Medicineにするか、Agricultural Medicineにするかで議論が分れた。その頃の同志は農協病院を中心とする医師と関連をもつ職種の人々で、ささやかであったが、泥田に足をつつこみ、土にまみれながら農民とともに健康を考え、これを守るという使命感が、それらの人々の胸に秘められていた。結局 Rural と決定したのも単なる農業のみでなく、人間すなわち農民と農村環境を含めての医学というニュアンスをもってのいるわけである。

この4月イランで開催される第2回アジア農業農村医学会議では、この両者を併記してある。日本以外の欧米では Agricultural Medicine と古くから使われ、その業績も、日本とは取り上げ方がちがっている。日本の多くの人々の参加を期待して取て Rural という文字を取入れたものであろう。両者の厳密な区別をすることはむづかしいが、Agricultural の方はアカデミックの含みが多い。農薬、農業衛生工学、農業機械、土壌水質、人間工学、環境汚染などで、その研究の進め方は客観的の傾向が濃い。日本ではご承知の如く、初めての私どもの中心課題は農夫症であり、この分析には人を対象として数多くの要素の上に築きあげられたものであり、日本的農村環境とそこで働く農民とのかっとうのからみ合いを表現したもので、主観的要素の影が濃い。

そのためにこの研究の進め方に対し、アカデミーの立場から一部の人々によって鋭い批判を浴びたことも再三ではなかった。しかし日本農村医学会はこれに耐え農夫症という症候群を定着させた功績は評価していいと思う。

創立後20数年、わが国は高度経済成長の波に乗り、農村の変貌はめまぐるしいものがあり、人口構成、農地転換、工場進出による環境汚染、とくに農業機械の一般化に伴う省力化など多くの因子が健康に大きな影響をもたらしている。従って農村医学の指向するところも大巾に変更、または多様化され、主観的考察より、客観的事実の攻究を余儀なくされたといえる。この現状をみつめるとき、農業医学を主流とした欧米の研究に近づきつつあり、時にはその軋を一にするものもある。かつて一握りの同志とともに発足したこの学会も、今や全国的に医育機関、研究所、さらに保健衛生関係者と多数の人々の参加をみ、昔日の感を深くする。

このような情勢をみつめながら、私は最近考えてみたことを述べたいと思う。

それは昨年11月、東京で開催された第15回農民の健康会議である。この会議の主テーマは「今日の農村と健康」で、その中心は出稼農民の健康と老人の健康である。若月俊一氏の講演で出稼農民の健康障害について言及し出稼による犠牲を「高度経済成長における人身御供」と強調した。そもそも今まで農民の健康会議において論ぜられるのは、農村の暗

い面の陳述が多く、それに対する施策、ことに現実にそくしての面を語る事が少いような気がした。この会議の運営の拙劣さもあり、終始選ばれた演者の独壇上となり、折角遠路参集された人々の意見を充分吸い上げられない感が多く、時間的制約で打ち切られることも多かった。

今度の出稼の問題は、東北地方中心に進められていた研究であり、わが国では東北、南九州がその主要地域で、富山県では切実に身近にせまらない。富山県農医研も、この研究に手を染めているが、対象者のしゅう集に苦勞された話を聞いている。出稼地域農民の健康障害は看過できない、かつ留守家庭は、主婦、老人を含めて、精神的、肉体的、社会的に各種の問題点をはらんでいることは事実である。ただこのような会議には、出稼の少い地域の人々より、その社会環境の説明を求め、出稼そのものを解消するには如何にすればよいか討議してもいいのではなかろうか。例えば出稼の少い地域である北陸（能登を除く）の姿は東北とどう違うか、経済開発に如何に対処しているか。北陸地方の農家収入（農外収入を含めて）は都市居住者を上まわっている。これはいくら批判があっても工場誘致の結果であり、農業労働の省力化による余剰労働力のはけ口が、ここに求められたと云ってよい。東北地方の出稼地域に基盤の確固たる工場の誘致は考えられないだろうか。地勢上よりみて工業用水の豊富なことは他地区に劣らない。ただ気になるのはエネルギー源の確保であろう。エネルギーの開発、エネルギーがなければ大工場の誘致は困難であろう。各地で発電所建設反対ののろしがあがっている。これでは永久に出稼問題が解決しそにもない。為政者、住民ともに検討すべきことだろうが、このような論議は健康会議ではほとんど聞かれない。

成程これらの地方にも工場の進出がみられるが、余りにも零細で、企業基盤もなく、総

需要抑制、金融引締めがからみ、労働条件が益々劣悪化しているとのことである。農村医学は社会医学であり、この点よりも現象的の医学のみにこだわらず、これを基礎として、国の政策面へも大きな示唆を与えてよいのではなかろうか。ただしイデオロギーの問題があれば別だが。

以上健康会議に出席しての印象の一片であるが、農村医学研究者は中広い分野に基礎をもち、単に医学だけでなく、社会学、政治学、哲学、心理学にもまたがるものである。現象論だけでなく、その解決のため大きな視野の上になつて討論を進むべきであろう。

私は上述したような考えて討論に加わったが、高度経済成長のしわよせが農民の上にかぶさったという答えしかかえらず、政府予算に関してくと防衛予算をまわせばいいではないかということになる。最後はイデオロギー論争になりかねない。

私は語弊があるかも知れないが、日本の繁栄は自由主義経済の基盤によるものと考えている。この基盤になつて論議せねば焦点が噛み合わない。

しかし今度の健康会議に当り、私は運営について要望しておいたので、フロアからの意見も活発で、今までにない実のあるもので、成功であったと思っている。

私はここに述べたことは、日本農村医学会の歩みでもあり、これは激しくゆり動いた歴史の流れをしみじみ感ぜられる。研究の方向は主観的より客観的観察へ、すなわち農村医学より農業医学への歩みが進められている。それはそれでもいい。しかし戦後の農地改革により、日本は地主制度という封建的重圧から開放された。それでも日本の農業は古い因襲が低流として、なお存在し、新しい農村の創造は未だしの感がある。表面的には農業の近代化により、農民の健康は改善されつつある。ただ日常の農村の真の姿を眺めるとき、農民の健康会議に取り上げられた出稼と健康

破綻も地域によっては社会問題として注意を喚起されている。従って農村医学に志ざす私どもとしても、今後取り扱うべき数多くの問題が残されている。このうちには国の政治にかかわる場合もあるが、徒らにイデオロギ一に終始せず、良識をもって対処したいものである。

時代の変遷はあらゆる分野に影響をもたらす。農村医学も例外ではない。私は最近の農村医学の動向について感じたことを述べたが、富山県農村医学研究会も創立以来6年の歳月を閲みし、今後会員諸氏と共に健康で明るい農村造りの一助にも資したいと考えている。